■研究調査レビュー

近世琉球における漢籍受容

高津　孝（鹿児島大学法文学部）

１，奄美と漢籍

昨年、平成15年（2003）12月、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科の地域貢献事業の一環として、奄美大島名瀬市で行われた公開講座に出講した際、名瀬市立奄美博物館内に設置された鹿児島県奄美群島歴史資料調査室において、調査室調査員の児玉永伯先生のご好意で、喜界島の盛山家文書の一部という近世琉球王国時代の漢籍を拝見することが出来た。平成５年より断続的に近世琉球の残存する漢籍の調査を行ってきたが、確実に奄美群島において所蔵されていた近世琉球時代の漢籍を拝見するのは始めてであった。これまで、沖縄本島、石垣島、久米島を中心に調査を行い、併せて本土の鹿児島、東京等に流出した近世琉球漢籍の調査も行ってきたが、奄美地域に関する情報は極めて乏しいものであり、調査の手がかりを得ることすら困難であった。今回、鹿児島県による総合的な歴史資料調査が行われることで、奄美地域から近世琉球時代の文書とともに漢籍についても掘り起こしが行われ、近世奄美の文化的状況解明に関する資料が一層発見されることを期待したい。

盛山家文書中の漢籍は、和刻本『四書集註』の残本４冊である。『四書集註』とは、儒教の最も基本的な古典『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書に対して、南宋の思想家朱熹が注釈を付けたものである。朱子学の基本的な著作物として、江戸時代以降、日本社会で広く読まれた書物である。版心に「後藤點」と刻されており、江戸時代の有名な儒学者で高松藩に仕えた後藤芝山（1721－1782）の読み方で返り点、訓点が施されていることが分かる。また、和刻本とは、基本的には明治時代以前、日本で木版印刷出版された中国人著作を指す。中国で木版印刷出版されたものは、唐本と呼んでいる。和刻本と唐本の区別は、紙質、字体、刊記、返り点・訓点の有無等で判別する。盛山家の『四書集註』は幸いに書肆の情報が掲載されている奥附が残されており、出版に関係する詳しい内容を知ることが出来る。以下、奥附の内容を記すと、

寛政四年壬子初夏御免　上刻
寛政六年甲寅孟春　発兌
文政三年庚辰孟春　再刻
天保六年乙未孟春　三刻
天保十一年庚子孟春　四刻

東都書肆　日本橋通壱丁目
　　須原茂兵衛
同　書肆　神田新石丁
　　須原源助
平安書肆　五条通高倉東入丁
　　北村四郎兵衛
浪華書肆　上町南草屋町
　　山内五郎兵衛

この奥附によれば、江戸時代の寛政４年（1792）の初夏に幕府から『四書集註』出版の許可が下り、２年後の寛政６年の１月に版木が完成し、刷り上がったものを売り出したということになる。この出版に関係したのは、三都（江戸、京、大坂）の書肆で、おそらく共同で出資し、それぞれが三都で売り出しの小売店となったのであろう。この本は大変売れ行きが良かったらしく、版木が傷んで刷り

が悪くなると、文政３年に再刻が、天保６年に三刻が、天保11年に四刻が行われ、盛山家のものは、四刻にあたる。この『四書集註』が三都の何れの書肆から盛山家にどのようなルートを通じて辿り着いたかは不明である。各冊見返しに「坂嶺藤千代」と墨書きがあり、おそらく所持者の名前と考えられる。

２，近世琉球の基礎的教養

所蔵漢籍の調査にあたって各種機関から様々な要望を提起されることがある。特に多いのが、目録作成だけでなく内容についても簡単な解説をつけてほしいとの要望である。博物館、図書館等では、資料の重要性自体は理解できるが、一般の市民に対する公開性という点で、内容についての平易な紹介が必要ということである。これまでの近世琉球漢籍調査に基づき、近世琉球期の一般士族の基礎的教養を形成した漢籍について簡単な紹介を行う。これらは今後、奄美地区で発見される可能性の高い漢籍でもある。

『四書集註』

儒教は、紀元前５世紀の思想家孔子に始まる世俗的倫理を中心にした思想であるが、12世紀に南宋の朱熹が現れ、仏教・道教の影響を受けた新しい世界観から儒教の古典を再解釈した朱子学が出現する。朱子学以前は、五経と呼ばれる５つの儒学の古典『易経』（『周易』）『書経』（『尚書』）『詩経』（『毛詩』）『礼経』（『周礼』『儀礼』『礼記』）『春秋』（『春秋左氏伝』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』）が中心であった。唐代に編纂された『五経正義』が王朝公認の注釈書である。ところが、南宋になって朱子学が生まれ、そこで重要視されるようになったのが、四書である。四書は、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の４つの儒教経典で、『大学』『中庸』が『礼記』中の哲学的内容の章を独立させたもの、『論語』が弟子達が書き留めた孔子の言行録、『孟子』が孔子の没

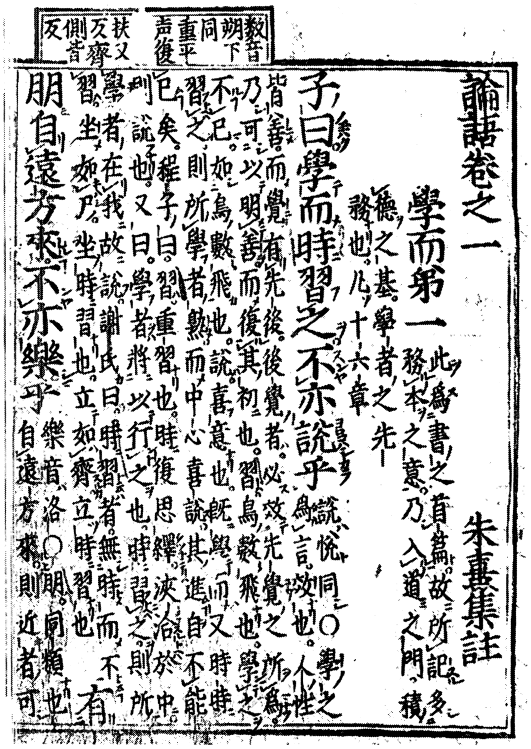
論語卷之一　朱熹集註
學而第一
子曰學而時習之不亦說乎
朋自遠方來不亦樂乎

図１　文之点『四書集註』論語巻頭

後150年後に活躍した儒教の思想家孟軻の著作である。そしてこれら４つの著作に朱熹が彼独自の思想に基づき詳細な注釈を施したものが『四書集註』である。江戸時代に幕府体制を支えるものとして朱子学が受け入れられて以降、『四書集註』は当時の支配階級武士達にとっての必須の教養書となった。したがって、現存する江戸時代の刊本は極めて多く、江戸、京、大坂の三都を始めとして、各地でおびただしい量が刊行された。

『大学』は、宋代以降、儒教を学ぶものにとって必読の書物で、宋代以降の新儒学（宋学）、朱子学の目的がここに述べられている。『大学』の内容は、三綱領、八条目にまとめられる。三綱領とは、「明徳を明らかにする（本来ひとの持っている明るく輝かしい徳を明るく輝かす）」「民を新にする（人々の徳も輝かせる）」「至善に止まる（最善の所に止まる）」である。八条目とは、「格物（事物の理を極める）」「致知（自己の知識を完璧にする）」「誠意（意識を純粋にする）」「正心（心を正

しくする)」「修身(自己を道徳的に制御する)」「斉家（家をととのえる)」「治国（国を治める)」「平天下（天下を平和に治める)」である。『中庸』は、偏りのない、過不足のない在り方を積極的道徳原理として説く書物である。朱熹は『中庸』を心の問題をめぐっての実践哲学の書として非常に重視している。『論語』は、孔子の言葉を収めた書物として古来非常によく読まれてきた。中国にあっても、子供が最初に学習する書物のひとつに必ず挙げられる。江戸時代の日本でもよく読まれた書物で、『論語』に由来する成語は数多い。『孟子』は、孔子の曾孫弟子で、孔子に始まる儒学を嗣いだ孟子の著書であるが、特に仁義の道を重視し、仁政に基づく王道という政治の在り方を主張している。

『四書集註』の日本における受容の仕方は、訓読という方法を用いて日本語に直して音読し解釈するという方法が行われた。その読み方を示す記号が、訓点（返り点と送り仮名）である。盛山家で発見された『四書集註』は、何種類も存在する訓点本の中でも、江戸後期の日本で最も広く行われた後藤点、すなわち後藤芝山による訓点本である。後藤芝山（1721－1782）は、高松藩士の家に生まれ、名は世鈞、号が芝山である。18歳で江戸に出て、幕府の学問所である昌平黌で学び、33歳で帰藩し藩儒となった。彼の朱子学に基づく『四書集註』の訓点は後藤点、芝山点と呼ばれ、江戸後期、日本全国に広く行われた。

今ひとつ、近世琉球において重要な『四書集註』の訓点本がある。文之玄昌による訓点本で、文之点と呼ばれる。文之点『四書集註』は、島津家に仕え朱子学を研究した薩南学派の祖である桂庵玄樹（1427－1508）の訓点本を、桂庵玄樹三世の弟子文之玄昌（1555－1620）が整理を加えやや簡略にし、文之玄昌の門人泊如竹（1570－1655）が跋を加え刊行したテキストである。日本最初の訓点本『四書集註』の刊行として有名である。近世

図２　文之点『四書集註』論語巻末絵図

琉球においてはとりわけこの文之点『四書集註』が尊重された。

桂庵玄樹は、朱子学に精通し儒仏不二を説いた禅僧岐陽方秀（1630－1424）の和訓を受けて、明応10年（1510）に、博士家の古点法（奈良平安時代以来の古い漢文解釈法）に代わる新しい訓読法を記した『桂庵和尚家法倭点』を著している。桂庵点は、門人の月渚玄得、その門人の一翁玄心を経て文之玄昌に伝わり、文之玄昌の『四書集註』訓点本が、その門人泊如竹により寛永２年（1625）に刊行された。泊如竹56歳の時、江戸において書かれた跋文を有するが、出版は、中野道伴という京都の書肆によるものである。泊如竹の跋文は寛永３年（1626）刊本のものであるが、『和刻本漢籍分類目録』によれば、以後このテキストは、寛永８年（1631)、寛永20年（1643)、慶安２年（1649)、３年（1650)、万治２年（1659）と重刻されている。

文之点『四書集註』の底本は、明末、福建の書肆余明台の刊行したテキストである。角

書きや版心に「大魁」（大きな文字）の文字があることが多く、大魁本『四書集註』という。明末の出版界では、挿図本が流行したが、この大魁本『四書集註』の特徴も巻末の挿図にあり、文之点『四書集註』もそれを受け継いでいる。

文之点と琉球との関係を考える場合、最も重要な指摘を行っているのは『三国名勝図会』である。『三国名勝図会』巻五十如竹翁伝には、泊如竹が寛政９年（1632）から11年（1634）まで琉球滞在中に、琉球王尚育の師となり、文之点の四書を用いて訓読法を教え、当時、久米村を除く琉球の十分の八が文之点の四書を用いていたという。

『小学』

『小学』は、前述の四書中の『大学』に対応する子供用の入門学習書である。朱熹の編とされることが多いが、実際は門人の劉子澄が朱熹の指示のもとに淳熙14年（1187）に編纂した書物である。子供が８歳になって以降、学ぶべき事柄を、四書を始め種々の書物から抜粋し編纂している。内篇は、立教、明倫、敬身、稽古の４篇、外篇は、嘉言、善行の２編からなる。明の陳選による注釈書『小学句読』の和刻本が江戸時代広く行われた。たとえば、後楽園の名前の元になった北宋の政治家・范仲淹の「天下の憂えに先立ちて憂え、天下の楽しみに後（おく）れて楽しむべし」という言葉も、『小学』善行篇に採用されて有名になった。

『二十四孝』

『二十四孝』は、中国の古代から宋代までの二十四人の親孝行な人物についての書物で、それぞれの孝子について五言絶句を付し解説を付けたものである。テキストの系統は三種有り、選ばれた人物に相違がある。一つは、元。郭居敬の撰とされる『二十四孝詩選』の系統であり、いま一つは、明．万暦年間福建の書肆劉竜田刊行『新鍥類官様日記故事大全』の系統、三つめは、朝鮮高麗朝に成立した『孝行録』に引用するものであり、これは七言絶句を付したテキストが存在する。近世琉球で広く行われたのは『二十四孝詩選』の系統で、琉球のことわざ集である『琉球俗語』の注釈書には『二十四孝詩選』を引用して説明がされている。『二十四孝詩選』によると、24人の孝子は、1，大舜、2，漢文帝、3，丁蘭、4，孟宗、5，閔損、6，曾参、7，王祥、8，老莱子、9，姜詩、10，黄山谷、11，唐夫人、12，楊香、13，董永、14，黄香、15，王哀、16，郭巨、17，朱寿昌、18，剡子、19，蔡順、20，庾黔婁、21，呉猛、22，張孝張礼、23，田真、24，陸績である。

『三字経』

『三字経』一巻は、旧題では南宋の著名な学者王応麟（1223－96）の撰とするが、おそらくは偽託であろう。明・黄佐『広州人物伝』や清・屈大均『広東新語』、清・惲敬『大雲山房雑記』に言う宋末の区適、字正叔、南海（広東）の人、あるいは、清・邵晋涵の言う明・黎貞、宇彦晦、新会（広東）の人が著者であろう。何れにしても子供用の俗な書物ということで、著者名もはっきりしないのである。「人之初、性相近、習相遠」に始まる三字一句の韻文形式をとり、暗誦し易くなっている。内容は子供むけの道徳教育の書である。中国では『千字文』と共に子供用教科書として広く行われた。日本においても江戸時代に広く行われ、少なからぬテキストが刊行されている。『三字経』の基づいた古典を明らかにしたものに、清・王相『三字経訓詁』があり、八重山博物館には、『三字経訓詁』の和刻本が所蔵されている。

六、『朱子家訓』

八重山博物館には、「父之所貴者慈也。子之所貴者孝也」（父親として貴ぶべき道徳は慈

しみである。子供として貴ぶべき道徳は親孝行である）に始まる「朱文公家訓」と題する写本が所蔵されている。「朱文公」は一般に南宋の朱熹を指すことから、この写本は朱熹の家訓となる訳であるが、これは誤りである。このテキストは、清・朱用純「朱子家訓」一巻で、江戸時代、『六諭衍義』とともに広く行われ、刊刻も多い。『朱子格言』『治家格言』『朱夫子治家格言』ともいう。朱用純（1617－1689）は、字は致一、号は柏廬、昆山（江蘇）の人。明末清初の朱子学者であり、康熙年間に、清朝から博学鴻詞となり仕えるように薦められたが固持した。

近世琉球で行われた教科書にはいかなるものがあったか。真境名安興『沖縄教育史要』第三編近世期によると、近世琉球で使用されていた教科書は以下のようになる。程順則によって康熙57年（1718）久米村に明倫堂が設置され、そこでは『小学』『四書集註』『五経集伝』『四書備旨』『四書体註』が用いられた。嘉慶３年（1798）に設置された国学においては、『四書』『五経』『唐詩合解』『四書体註』『詩経衍義』『書経体註』『易経会解』『礼記陳浩註』『春秋胡伝』『二十一史』『尊駕』『白姓』『人中画』が教科書として用いられた。嘉慶３年（1798）国学と同時に設置された平等学校では、『四書』『小学』『五経』が教科書として用いられた。道光15年（1835）に設置された村学校においては、『三字経』『二十四孝』『小学集註』『四書』が教科書として用いられた。明倫堂と国学は、一方は久米村にとっての、また一方は王府にとっての、かなり特殊な人材養成機関であるから別格として、近世琉球全体の基礎的教養を窺うには平等学校と村学校の状況を見なければならない。おそらく、児童教育に関しては、これら学校の設立以前から、『三字経』『二十四孝』『小学』『四書集註』が用いられてきたと考えられる。これまでの琉球地域における漢籍調査を考慮すると、近世琉球の基礎的教養は、江戸時代日本のそれと極めて共通すること、また、そのテキストについても、江戸時代日本で刊行されたもの、乃至はその写本と考えられるものが殆どであることが分かるのである。この特徴は、近世琉球全体に共通するものと考えられ、今後、奄美地区で発見される漢籍も多くはこれらの一部であろうと推定される。